

令和元年
6月13日[木]——6月30日[日]

会場 | 氷見市海浜植物園 1階特設ギャラリー
9:00—17:00 火曜日休園
[入場無料]

漂着物アート展
2019

プロデュース/富山大学芸術文化学部 長田 堅二郎
 [主催] (一財)氷見市花と緑のまちづくり協会、(公財)環日本海環境協力センター
 [後援] 富山県、富山大学芸術文化学部、(公財)とやま環境財団
 [協力・作品制作] 富山大学芸術文化学部

Plastics Smart

富山大学芸術文化学部生 作品一覧

最優秀賞



ヘルプ・アース？

金山 謡

本来は生き物を救うはずの薬や医療用品が、ひとたびごみとなって海を漂うと、反対に生き物を殺傷する凶器へと化す…。

この矛盾した現象を考えるきっかけになるような作品を目指した。一般の医療ごみも利用しているが、実際、海洋ごみにおける医療系ごみの割合は決して少なくない。

Help us, Help Earth?

優秀賞



漂流物六重奏による「海の音、音の海」

福嶋 純之

寄せて返す波、潮風に揺れる木々、空を飛び交う海鳥。海には様々な音が響いていて、漂流物たちはそれらを聴きながら流れ着いたというイメージを基に制作しました。6つの異なる漂流物楽器たちがどんな音楽を奏でているのか想像しながらご覧ください。

優秀賞



埋もれた光

伊藤 日向子

今回は、“ゴミで埋もれた海”をコンセプトに作品を造った。青と白の電球は海と砂浜を表しており、それを覆うものはすべて氷見海岸で拾った漂着ゴミである。人が捨てたゴミが海岸に散乱し、かつては美しかった光景が今では消えてしまっている様子を表現した。しかし、海の美は無くなってしまったわけではなく、ゴミに隠れて見えていないだけ。その捨てられたゴミを人の手で取り除くことができれば、再び美しい海を取り戻せる。その可能性を、竹やポリタンクの中にある光の灯った花で象徴させた。

奨励賞



海のドラマー

岡本 千尋

海岸で様々な漂着物に出会いました。その中で1番目についたのが青と黄色の浮きです。捨てられた浮きを何かに使えないかと考えた時、黄色の部分が意外とかたく、中身が詰まっていることに気がつきました。叩くと私が想像していたものより高めのかたい音がしたので楽器になるのではと思い、ペンキ缶や発泡スチロールを組み合わせてドラムを作りました。

何年も海を漂った浮きの耐朽性を、ぜひ実際に叩いて肌で感じてみてください。

奨励賞



侵食

鎌上 大輔

自然のものである貝殻と、人工物であるプラスチックごみとの対比で、生物や環境に起きている変化を表現してみました。

奨励賞



無人島生活1日目

岡本 美玖

漂流物によって汚染された氷見の海岸を見て、私はふと無人島を連想した。海洋汚染が深刻化している地球のどこかの無人島でも、きっと氷見の海岸のようにになっているに違いない。そう思い、私は名前もわからない無人島への思いに馳せることにした。

まず、無人島生活に必要なものはなんだろう。きっと日ざしが強く、強いスコールだって降ってくるだろう。ならば、パラソルを作れば良いはずだ。材木を集め、雨風を凌げるビニールとちよつとの装飾も加えよう。最後に、持ち手をつけて…。ほうら、出来た。

奨励賞



Blue・Blue・blue

張 文濤

視点の変化を通じて、人間に漂着物に対して、異なる視点を提供し、
環境現状を表現する。